両片思いアンソロジー
銀の
リナリア

補魂の使途

立神勇樹

風がこずえを揺らし、大地から枯れ葉を巻き上げる乾いた音さえも耳に大きく響く。
常闇の地である根堅州の国の夜は、とくに冷え込む。
地面に接する足裏や、しゃがみこんでいる尻からも、底冷えする氷のような空気が身体から確実に体温を奪っていく。
それでも希夜は両手に刃を握りしめ、けものの巣穴を囲む茂みで息を殺し、獲物の帰りを待っていた。
この国の特異な気候に適応した、夜行性の灰色うさぎを。
どうかすると震えそうになる両のこぶしに力を込めて気配を消す。月が無いのは運が良かったが、それでも油断はできない。
村や里を避けて逃げ続けていたため、もう食糧が無いのだ。
川や海の浅瀬を渡った時に取り貯めした小魚の日干しは、すでに昨日の朝に食べつくした。乾飯もとうもろこしの乾燥団子とてひとつも無い。
雨が降ったのと、泉が豊富な森や海辺づたいの旅ゆえに飲み水には困らなかったが、空腹はどうにもならなかった。
飢えれば力が抜けてだるくなる。そのぶん追っ手に見つかり逃げることが難しくなり、都に連れ戻される事になるだろう。
光に焦がれる反乱の民や、先の日継ぎの御子を慕う勢力もいるとはいえ、今上が夜の大王の力はまだ絶対の服従を民に強いていた。
かさり、と音がして茂みが揺れた。
小さな影が草の根元から、あたりをうかがう様子で動いている。
機会は一度だけだ。希夜は逃亡生活に邪魔になる。と短く切った髪が風に揺れ、背中に触るのを感じながらそろりと息を吐いた。
影が巣穴に向かって走り出す。それに覆い被さるように希夜も跳ねた。
肉を切り裂く生々しい手応え、顔に跳ねる血のぬるさに顔をしかめる。
闇輝晶の銀の星散る刃の下で灰色うさぎの身体がびくびくと痙攣する。それに手を緩めること無く希夜は歯を食いしばる。
やがて小さな生き物は動きを緩慢にして、最後の吐息を漏らし息絶える。
利那。
漆黒とも蒼ともつかない粒子が渦をまきながら希夜の身体の周囲をめぐり、手に持つ漆黒の刃に吸い込まれて行く。
自分とは異なる力が、毛穴という毛穴から入り込んでくる

ような感覚に怖気が立つ。
懐刀より長く、太刀より短い半端な、童子用の小太刀といった希夜の刀は渦を吸い込むごとに蒼光の流線模様を浮かび上がらせる。
その様子を見つめながら希夜は唇を強く引き締めた。
――魂を捕らえた！

逃亡先の小屋は、森を背負うようにして切り立った崖の下にある漁師小屋だった。
板塀を荒縄でくくり、茅で屋根をこんもりと覆った、嵐一つで吹き飛びそうな小屋の影からは、冬の荒波ゆえに砂地に引き上げられた舟の舳先がみえており、まるでいびつな鳥がくちばしをつきだしてうずくまっているようだった。
冬なればこそ高い潮ゆえ漁村の民もちかづかぬ小屋の影まで、始末した灰色うさぎの肉が入った袋と、捕らえた魂を移し替えた魂石をつめた袋とを両の腰帯にさげ、小太刀を差し歩いていると、奇妙な音が希夜の耳に届いた。
砂浜の波際を複数の馬が駆ける音だった。
はっ、として茂みに再び身を隠す。
ここ数日、雪もちらつく寒さであったため火を焚いたのだが、それを見回りに来た漁村の民にみつけられ、捕魂導師か兵士に告げられたのかと不安になる。
兵士ならば、まだいい。捕魂の石はすでに袋一杯にたまりつつある。十人やそこいらなら幻影や炎術などで惑わし逃げることができるだろう。
だが、捕魂導師や捕魂行使であった場合はまずい。
今の希夜には彼らの集団とやりあうだけの石がない。とくに、大王から使わされた捕魂導師であった場合、逃げるのは困難を極めるだろう。――そして捕らえられ、都につれもどされる。
それだけはなんとしても避けねばならない。
麻の衣装に鹿皮の襲をかさねた軽装に手をやり、寒さと怖さをこらえる為にぎゅっと毛皮のふちをにぎりしめ様子をうかがう。
感づかれないように息をころし、つめる。
都には二度と戻りたくない。否、戻れない。
父をあのような殺され方をして、記憶を奪われたというのに、大王はなぜ私をまだ欲しがるのだろうとくやしくなる。
きっと、父の敵を討とうと牙をむきながらも、絶対的な力の前に抗えない子ねずみをなぶり、ながめ、楽しむ猫と同じこころもちかほんの気まぐれなのだろう。

それほどまでに王宮は大王にとって退屈だというのか、それとも、隣り合う月の女神の国の末姫を妃に迎えた余裕からなのか。どちらでも希夜には関係ない。

どうして父を殺したのか。それを知り、奪われた幼い頃の記憶をさぐるには大王の元へたどり着くしかないというのに、いまだ、捕魂導師や兵士に追われるままにある。その弱い自分が悲しい。

十六にもなって情けないことだとわかっていたが、考えるだけで子供のように涙が出そうだった。

馬の荒々しい足音が浜辺で交差する。

漁師小屋のすぐ側まで来たのに、一向に止まる気配はなく、それだけではなく鉄をまじえる甲高い音さえ混じりだしていた。

戦っている。何者かと何者かが。

自分への追っ手が仲間割れしているのかと、そっと顔を木陰から出す。

闇夜のことで見えないが、武人然とした黒髪の男が角髪がほつれ、ほどけそうなばかりに太刀を振り回しては、兵士や捕魂導師とおぼわしき影を切り捨てていく。

だが、それもしばらくの事で、大きかった円は徐々にせばまり、やがて男の背後から捕魂導師の黒曜石の仮面をかぶった黒絹襲の男が光る石を手にかかげ何かを口走る。

途端、石が青く輝きはじけ、兵士の持つ剣に炎の力がやどり周囲が明るくなる。

あまりの輝きに希夜は眼が眩んだが、不利一方、そして自分と同じく追われている武人を放っておく事にいらいらとした感情が芽吹き始めていた。

自分自身の為には、ここに隠れていたほうがよい。

だが、万が一男が自分を助けに来た父の仲間であったなら、むざむざと見殺しにして良いものだろうか。数瞬のためらいの後、希夜は魂石が詰まった袋を取りだし、その中でも蒼い魂を閉じ込めた水晶の一つを手に握りしめた。

根堅州の国の夜の神さま。闇の長兄にしてすべての死を背負う御方。どうぞ貴方の為にこごりし魂を差し出します！

心の中でつぶやいたのか、実際に唇が動いていたのかわからなかった。だが、幼い頃から仕込まれた捕魂の術が緩やかに儀をなしおえる！

途端、玻璃の割れるに似た音がして、魂を封じ込めた貴石が、水晶の透明な一つが真っ二つに割れ、中から氷の大蛇が生み出され、兵士たちの刃をかみ砕き、果てには油断していた捕魂導師の腕に食いついた。

一斉に視線が希夜のほうへ集った。

武人の黒曜石じみた眼が奇妙に鮮やかに見えた。
兵士の手から落ちた刀に燃える炎が、鋼に見事な漆塗りの手甲と、将軍たるにふさわしい流麗な銀の模様を浮かび上がらせた。
利那。
氷の蛇から逃れていた別の兵士のやぶれかぶれの一太刀が、武人の背中を斜めに切り裂き、武人は苦痛の顔もあらわに落馬した。
「捕魂導師が居るだと!?」
「仲間か!」
口走る兵士や捕魂導師をほかに、希夜は指に四つの捕魂石を構え、利き手には小太刀をすらり抜き、砂を蹴ってかけだしていた。
黒曜石の仮面を着けた男、捕魂導師の印が銀で刻まれた仮面の男が息を飲む――どうやら、相手方の捕魂導師はひとりきりであるようであった。ならば、幼い頃から息をするように捕魂の術をたたき込まれてきた希夜のほうが有利だと思えた。
風を呼び、影を我が兵士とし、森から緑の手を伸ばしからませる幻影を立て続けに、息継ぎする暇も与えず繰り出しては、馬から落ちてきた兵士ののど首を捕魂の小太刀でかき斬る。
灰色うさぎとはくらべものにならない大きな魂が、思念がまだ魂のこめられていない希夜の石袋にすいとられていっては輝き、まるで虹のようにめくるめく色の光をともらせる。
砂浜の上で無様に尻餅をつき、後じさる捕魂導師を前に返り血だらけになって立っていると、男は小娘の希夜を前に引き連れた悲鳴をあげたあと……はっと息を飲み口をひらいた。
「そなた、……その技、そこいらの捕魂雑師とはとてもおもえぬ。そうであろう。捕魂祭殿の姫御どのではあるまいか。希夜……!!」
最後まで、言わせなかった。
どうせ最後まで言わせたとしても、言わせぬとしても、すでに大王は自分の居場所を水鏡かあるいは偵察兵である伺見の司から、この兵士たちとの騒ぎをつきとめ、知られるのだから。
次々と寄せる荒波が、満潮の近いことを告げていた。
希夜は、生活にどうしても必要なものを兵士達の骸からはぎ取ると、討たれ落ちた武人を冷ややかに眺めた。
ただの骸となった兵士たちは、満ち潮に飲まれて海の底へ沈んでいくだろう。
ただ、馬だけはその運命を受け入れさせるには哀れで、鞍

を取って好きに逃げるままにさせた。
もっとも、黒髪の追われ人が乗っていた馬だけは忠実にその場に残っていたが。
あらためて希夜は追われ人たる青年を見た。
艶のある黒髪、はっきりした目鼻立ち。今の大王とは違う、陽に焼けた武人の姿は、身に着けている衣はやけに上品であり色あせたとはいえ紫紺の上着や袴、金で作られた足結いの紐かざりの鈴などは、王都の名だたる将軍とも思えた。
どうするか考えるうちに、男の血はじわじわと衣を濡らしていき、波はひたひたと男の沓をぬらしていく。
考えた後、希夜はため息をついて捕魂石を取りだし、己の影にひとはしの命令を与え形なす使い魔とし、使い魔に男をかかえさせ漁師小屋へともどっていった。
一度助けたものを、見捨てるのはわがままのなすことだと、助けたひな鳥の世話を怠った際に父母にしかられた時の事を、残されていたわずかな記憶からふと想い出しながら。

ひどく背中があつく、そして周囲は潮臭かった。
薪を焚く煙の渋さに魚の脂のきつい匂いが、鼻からつんと抜け、途端に背中に痛みが走り、目覚めは最悪だった。
乾いた喉でつばを無理矢理のみこみ、煙で染みる眼をそろそろと開けると、わらを編んだ太い綱の束が顔の横にあり、そこには舟の腐ったかいが立てかけられていた。
気づいた事を気取られぬよう、そっと眼をこらせば、わらで編んだむしろ敷きの土間の上には獣の骨からつくった釣り針の壊れたものが見え、さらに、もりの欠けたものや腐った桶が転がっていた。
冬逃れの漁師小屋か、と見当をつけてぼんやりと頭を振る。
そうだ。昨日は村の土着の豪族に見つかり、歓待をうけ、今の大王で一月違いの生まれの兄である常夜への不満を聞く内に、大王に叛意がある豪族かと油断がめばえた。
その後、豪族の女官から岬に本来の日継ぎの御子を望む者が居ると言われ、酔いも手伝いついて行ってしまったのだ。
常夜にはめられた時に、あれほど人を信じないと決めたというのに、自分は存外に人恋しがりやなのだなと今更ながらに苦笑する。と、ことことと言う音がして、ついで鍋の木ふたを開ける気配が背中でして、さらに立て続けざまにふわりとかゆの良い匂いがした。
背後の気配を確かめるより早く、腹がぐうぅと情けない音を立てる。
一拍の静寂ののちに、くすくすと乙女の笑い声が聞こえた。

アオの後遺症

だも

その手の震えが畏れから来ているということに、当時、十六歳だったクロエ・マリは気づけなかった。

とても豪華な食事も、重厚な楽曲も、すべて色を失くしてクロエの前に横たわっている。色がついているものがあるとすれば、たったひとつ、目の前の、一枚の布だけだった。

いや、その布が、クロエから世界の色を奪ったのだ。

ドレスを握る手に力が入る。

ああ――

感嘆でも、諦めでもない。大きなため息が、胸の奥からこぼれ出た。

自分が主役でないことは、わかっていた。この作品展の入賞結果は、学校を通し、事前に連絡があった。クロエの作品は、選外。進学援助は受けられない。援助を受けず進学をするにしても、学校から離れるにしても、働く義務が発生する。すべて承知の上で、ここへ来た。だからこのとき、クロエは自分のことで失望をしたのではない。

最優秀作品、アオ。

はためくことなく、揺らめくことなく、その布は天井からまっすぐに吊られ、余った部分が床の上に広がって――そういうふうにデザインされた絵画なのだ――クロエは吸い込まれるように、一歩二歩と、足を進めていた。

タイトルに掲げられているとおり、さまざまな青で描かれた風景画である。

「ちょっと、きみ！　下がりなさい」

後ろから強く肩をつかまれて、はっとする。

作品である布を踏んでいたのだ。

「ご、ごめんなさい」

飛ぶようにして、その場を退く。

彼女の肩をつかんだ係員の傍には、先ほど、壇上で表彰されていた少年が立っていた。眼鏡の奥の黒い瞳が、まっすぐクロエを捕えている。

「ごめんなさい、あの……悪気は……」

言葉に詰まって、クロエはうつむいた。なんと言えば良いのだろう。

しかし予想に反し、彼は穏やかに笑うと、金色のトロフィを抱き直してクロエに歩み寄った。

「踏みこんでしまうような絵になってるってわかって、嬉しいよ」

背が低く、声もあどけない。制服の肩が余っていた。

十四歳だと言っていたことを、クロエは思い出す。

次の春より二つ飛び級することが決まり、コンテストの参加権が突如発生した、シクラ・ナオキであった。

＊

ピピッ……ピピッ……

アラーム音で、クロエは浅い眠りから引きずられるようにして起きた。反射的に右の手首に触れるけれど、目的のものはそこにはない。

そうだ、ここは、仕事部屋の椅子の上。

手さぐりでテーブルの上に投げ出されたリング状のデバイスを取って、手首に巻きつけると、小指を耳へ入れた。

「はい……」寝起きだと悟られない声を心がける。

「おはよう、マリ。調子はどう？」

「なんだ、カレンか」

電話の主が学友であると知れて、クロエは椅子の背もたれに、沈みこむように体重を預けた。先週、新調したばかりの椅子は、ベッドにできそうなほどに広くて柔らかい。

「なんだ、じゃないわよ。授業、サボってさ」

「うん、仕事がね」

「コンテストが近いんだから、学校に来ないと、審査に響くわよ」

「うん……」頬杖をついて、目をつむる。「そうだ、夢を見たよ、コンテストの。四年前の夢」

「頭のどこかでは意識してるってことね」

「そうそう、だから、大丈夫。ところで、いまって何時？」

「十一時」それを聞いて、三時間は寝たのかと、クロエは計算する。「午後の授業に間に合うでしょ」

「あとひとつ、仕事を終えたらね」

「もう……、きっとよ」

「うん、きっと」

電話を終えて、クロエは身体を伸ばした。

カレンの言うとおりだ、コンテストの招待状を得たければ、学校もおろそかにしてはならない。

二十年前から始まったカリキュラムは、義務教育課程を終えた学生に、一定の労働を課すというものだった。

労働といっても難解なものはなく、誰にでもできるようなものばかりだ。賃金も受け取れる。だが、時間を取られることには変わりない。ほとんどの学生は、それをまぬがれるため、試験なりコンテストなりで成果を収めようとする。そこで認められれば、労働は課せられない。

その機会は四年に一度訪れて、何度でも挑戦が可能だ。ただし、初回を除き、あとは申し込みに料金がかかる。それすらも惜しむならば、四年間で良い成績を出し、招待状を得る必要があった。

クロエは椅子を回転させ、広いテーブルに向き直ると、資料の上に置いたままになっているカップを取った。

昨日淹れたままのコーヒーだが、かまわずに口のなかを湿らすクロエである。そのとなりにある紙包みから取ったビスケットも湿気を含んでいるが、やはりかまわずにかじった。

空いている手で、テーブルの天板にさわる。

内蔵されているディスプレイが明るくなり、要求されたデバイス・ナンバーを、左手だけで、慣れた様子で入力する。

十八桁にも及ぶそれは、もしかすると誕生日よりも身近なものかもしれない。すくなくとも、この番号がなければ、身分の証明ができない。友人へ電話をするにも、学校の門をくぐるにも、仕事をするためにシステムへログインするにも、必要なナンバーである。

ディスプレイには、現在、クロエが請け負っている仕事内容が表示されていた。

一件のみのそれを、開く。

学校に行くためではない、納期を守るためにやるのだ。

クロエは定期試験が終わってすぐ、詳細を確認しないまま、大量の仕事を受領するクセがある。今回は、どうにもハードな内容が多かった。特に最後まで残ったこの一件には、納期が明日だというのに、未だにこころが決まらない。

本当は、この仕事のせいで、記憶の奥底からあの夢が出てきたのだろう。半年前に亡くなったデザイナー、ムラナ・ヨーコに関する情報を集める必要があるためだ。

四年前、シクラ・ナオキが油彩のカンバスに選んだのは、ムラナ・ヨーコの作品である布だった。

かつて、世界的に有名だったムラナ・ヨーコの布を大胆に使った彼の絵は、見る者をまさしくその世界へといざなった。

「サーチ。ムラナ・ヨーコ」

テーブルの上に、彼女の作品がサムネイルとなって表示される。シクラがカンバスに選んだものもある。代表作とされるものだ。

あのコンテストでクロエは選外であったが、この四年間の成績から、招待状が届くかもしれないという話が、教授からあった。いまさら、一日中絵を描いていたいとは思わない。働くことは楽しいと感じているし、賃金が貰えるのも悪くない。ただ、またあのアオに会えるだろうかと、クロエはひそかな期待を抱かずにはいられないのだった。

シクラ・ナオキの名を、この一年ほど、まったく聞かない。どの学校へ進んだにしろ、あのコンテストの連盟校であるには違いないのだから、動きがあれば些細な情報でも入るはずだ。

実際、一年前までは、新作が出るたびに友人たちとの話題に上ったし、その詳細をネットワークを通じて見ることもできた。

学校を移ったという話もなければ、留学したという話もない。彼は、忽然とみんなの前から消えてしまった。

その理由を知りたいとは思わない。

ただクロエは、彼が次に描くものが何であるか、知りたいのだった。

コンテストで最優秀賞を取ったのなら、この四年間がどんなものであったとしても、招待状が届くはずだ。

そこでの再会を、クロエは期待している。

早くこれを片づけてしまおう。

そう思いながら、ディスプレイに視線を落とし続けているクロエの目が、見開かれた。

その先には、一枚のサムネイル。

小指の爪ほどの大きさではあったが、それが、純粋なムラナ・ヨーコの作品でないことは、どうしてだかすぐにわかった。

同時に、強い予感を覚える。

息を詰めたまま、拡大する。オークション情報が付加されていて、出品者のテキスト・メッセージが流れた。

「お願い、あなたの思う値段で買って。ぼくはそれでホットドッグとコーラを買う」

出品時刻は、三十分前。

考えている暇などなかった。すぐに即決価格での落札手続きをし、要求された情報を入力していく。

ムラナ・ヨーコの布に、惜しみなく塗り重ねられた絵の具。

迷い込んでしまいそうなほどの、とりどりのアオ。

間違いない。

これは、クロエの直感だった。

シクラ・ナオキの作品であるという、クロエの直感であった。

「ひとり暮らししてるの？」

ワンルームの部屋に踏み入れた途端、彼はそう言った。

出品されていた作品がシクラ・ナオキのものだとしても、出品者がそうであるとは限らないと、クロエはもちろんわかっていた。その作品に興味があったから、相手が誰であれ買い取るつもりだったのだ。

しかし、待ち合わせ場所についたとき、すでにそこにいた男がシクラだということは、そう、ひと目見て明らかだった。

「うん、まあ……そうなるのかな」

鍵をかけて、クロエは答える。
先に入ったシクラの動きを感知して、窓のないワンルームの照明がついた。
「友だちとシェアしなかったんだ」
シクラは意外そうにつぶやく。
そうすることが一般的なのはたしかであるし、クロエもこの質問には慣れていた。
「タイミングが合わなかったの。実家が近くて、学校へはそこから充分に通えるしね。でも狭くて、制作スペースが取れなかったから、部屋を借りたんだ」
「そっか。でも、最近はあまり帰ってなさそうだね」
クロエよりすこし背の高いシクラは、長い指で制作用のテーブルを指して笑った。
両手を広げても余るほどの幅と、充分な奥行きを持つ天板の上は、ディスプレイになっている箇所を除いて、さまざまなもの——資料はもちろんのこと、着替えや飲料水のボトルなど——が散乱している。傍にある大きなゴミ箱も、インスタント食品の残骸などでいっぱいだ。
「いま、仕事が立て込んでるから……。もう、ちゃんと片付けるから、シャワー浴びてきてよ」
クロエは、頬が熱くなるのを感じた。

「この扉？」
「そこは、クローゼット。こっちよ！」
楽しそうに物色しながら奥へ入ってくシクラの腕を引っ張る。すると、彼は簡単に足元をふらつかせ、近くの壁は背中を預けた。
「あ、大丈夫？」思わず、その肩へ手を伸ばす。
「ありがとう、平気」
シクラは、クロエの手をやさしくさえぎった。
骨ばったその手は、男性らしく彼が成長しただけでは決してない。首まで覆う黒髪で目立たないが、頬もこけているようだ。爪も伸び、シャツの袖口は黒く汚れ、ジーンズのすそも擦り切れている。
クロエは玄関横の扉を開けて、そこへシクラを誘導した。
「好きに使って。バスタブにお湯を溜めてもいいから。洗濯機の使い方はわかる？」
「大丈夫だよ、えっと……」
「クロエ・マリ」
「ありがとう、クロエ」
外で二度も名乗ったはずだが、呼ばれたのは初めてだった。
扉を閉めて、キッチンへ行ってコーヒーメーカをセットする。

花の下、水なき空に

深海いわし

六条糸庵院の糸桜の美しさは人が恐れるほどだった。

樹齢千年を超えると言われる枝垂れ桜の大木は、夜に訪れればその妖艶な美しさで人の魂を捕らえて喰らってしまうのだと噂されている。

翡翠はそんな噂など信じる性質ではないが、初めてその花を見たとき、真昼の陽光の下でさえ魂を奪われるような心地に陥ったことは確かだった。

その花の下で、翡翠は彼女と出会った。翡翠が『桜の君』と呼ぶ、ただ一人の女と。

翡翠が妻を『桜の君』と呼び始めたのは、初めて顔を合わせたその日だった。

歩狼隊の長を務めていた翡翠は、副長の方霧三怜を伴って本隊よりも一足先に第一帝都黎京に入り、歩狼隊の駐屯地となることが決まっていた六条糸庵院を訪れていた。

長い歴史と広大な敷地を誇る糸庵院の、本来の住人である神仙道の神主たちは、田舎者揃いの歩狼隊を歓迎していない。遅々として進まない部屋の割り当てについての交渉を三怜に任せ、翡翠は前庭の様子を検分していた。

出自にうるさい宮中の女御たちすら、『この世の奇跡』と讃える涼しげな美貌を惜しげもなく春の日差しにさらして、散歩でもしているかのようなのんびりとした歩調で歩き回る。

所々にケヤキの若木が植えられているだけの前庭は広々と開放的だ。萌え出たばかりの若葉の明るい緑が、拝殿へ続く石畳に柔らかな影を落としている。青く霞む彼方の八神山を背後に、長い歴史に飴色の艶やかさを加えた木造の拝殿がそびえ立つ。

外洋風に短く切り落とした黒髪を、柔らかな風が撫でて通り過ぎた。仕立ての良い着物と羽織に身を包んだ翡翠は、男としては上背がある方ではなく体格も良くはない。それでも、気品と威厳を感じさせる美貌と、平民出であることを忘れさせる所作は、群衆の中にあるときでさえ、光り輝くような存在感を翡翠に与えてくれていた。相手を威圧するような迫力はなくとも自然と人の視線を惹きつけるこの容貌は、翡翠にとっては天から与えられた武器の一つだった。

先の皇帝が奉納したという大鳥居から手水舎まで歩きながら、この場所の利用方法について考える。広さと水飲み場があることを考えると調練にちょうど良いのだが、信仰をないがしろにすれば人心は離れる。となると、ここは今まで通り神仙道の領域として扱い、歩狼隊は表に出ない方が良いだろう。

「翡翠さん」

考えに沈んでいた翡翠は己を呼ぶ声に顔を上げた。張りのある低い声は聞き慣れた部下のものだ。声の方を見やれば、交渉という名の恫喝を取り仕切っていたはずの三怜が、妙に急いた様子で翡翠の所へやって来るところだった。

翡翠と同門の弟弟子で、今は歩狼隊の副長に収まっている三怜は、すらりと背の高い美男子だ。きちんと櫛を入れた髪を総髪に結い、羽織袴に帯刀しているが、本来ならば帯刀を認められることはない平民出の人間だった。

「客が来ているんだが……」

珍しく口ごもった三怜に、翡翠は首を傾げる。困惑したような三怜の反応も不可解だし、こんな所まで押しかけてくる客にも心当たりがない。

「僕に？　誰だい？」

「それが……黒瀬家の愁怨（しゅうえん）、と名乗っている」

「ああ。僕の妻にさせられるひとだね」

代々長老院を取り仕切ってきた名門、黒瀬家の娘。平和な時代であれば、得体の知れない戦闘集団を率いる平民出の若者などと、娶（めあわ）されるはずもない高い身分の女。

それが愁怨という名を持つ人間について、翡翠が知っているすべてだった。

困惑した表情のまま「中の庭で待たせている」と告げた三怜は、おそらく追い返せと命じられることを予想しているのだろう。

「わかった。行ってみるよ」

「しかし……供も連れていなかったぞ。黒瀬家の娘がそんな簡単に出歩けるものなのか？」

「あり得ないね」

微笑みながら、翡翠は言う。自分の妻になるはずの娘に初めて興味を抱いたのはその瞬間だった。

「どうやって抜け出してきたのかな？　それも聞いてくるよ」

「翡翠さん！」

そんなに簡単に決断するなと非難を込めた三怜の呼びかけは聞こえなかったことにして、翡翠は婚約者が待っているという中の庭へ、ゆったりと歩き始めた。

糸庵院の中庭は枯山水の石庭だ。全面に敷き詰められた白い玉砂利で描かれた地形は、美しい円錐形を誇る八神山と、そこから流れ出て志貴（しき）の国全土を潤す龍脈の流れを表しているのだという。その真白い海の中に浮島のように配された荒々しい岩と黒い飛び石が、穏やかな流水紋に変化と緊張感を与えている。聞こえるのは鎮守の森から流れてくる葉擦れの音と、時折混じる鳥の鳴き声だけだ。

時が止まったようなその庭の中で唯一季節を感じさせるものが、黎京の人々から敬意を込めて『糸桜』と呼ばれている枝垂れ桜の巨木だった。千年も前からこの地に根付いていたと言われる古木は、爛漫と咲き誇る豪奢な枝振りを誇らしげに中庭の四方へと広げていた。桜守が丹精込めて整えたその姿は、明るい白昼の庭にあってさえ、匂い立つような色香を放っているようだった。

その美しく咲き誇る桜の下に、彼女はいた。身に纏った桜霞の華やかな着物よりも、さらに艶やかな花のような女だった。みどりなす黒髪が、白砂と桜花の淡い色彩の中に浮き上がって見える。切れ長の瞳は黒曜石のように輝いて、つくりものじみた造形に生命の力強さを与えていた。

娘は重たげな枝を支える添え木を不思議そうになぞり、満開の花を見上げては差し込む陽光に目を細める。物珍しそうな、しかし馴染んだものに対するような遠慮のない様子で、彼女はしげしげと四方から桜を眺めている。

まるで初めて鏡を与えられた子どものようだ。そう思って、翡翠は笑む。姿形の美しさよりも、彼女が纏う空気の清澄さに惹かれた。

彼女が人間でないことはすぐにわかった。幼い頃から人ならぬものを見分ける能力が翡翠にはあった。他人に向けてどこが違うのか説明することはできないが、なんとなくわかる。おそらくはこの妖艶な糸桜こそが彼女の本性なのだろう、と。

「綺麗だね」

静かに話しかけると、桜の鬼は細く流れ落ちるような枝の間から振り向いて微笑んだ。

「お主、桜は好きか」

「もちろん。そうしていると、君はまるで桜の精みたいだね」

微笑んだまま、鬼の瞳が翡翠の心を見通すように細められる。

「君のこと、『桜の君』って呼んでも良いかな」

「構わぬ。妾は桜じゃからな」

楽しげな瞳の輝きとその答えに、翡翠は笑みを深めた。正体を見抜いた翡翠の存在を、鬼はあっさりと受け入れたのだ。

ゆったりと歩み寄って、その隣に立つ。既に夫婦であるかのような距離感に、しかし桜の鬼は普通の娘らしい恥じらいなど見せることなく、楽しそうな表情で翡翠を見上げた。手を伸べて桜の一房を手に取ると、ようやく女の表情に仄かな色のようなものが浮かぶ。

「どうして僕に会いに来てくれたのかな？」

「我が夫となる者の顔を一目見ておきたくてのう」

ふわりと、風に舞い踊る桜の花片のような軽やかさで女が

身を翻す。

「だがもう目的は果たした。また会おう、人の子よ」

「楽しみにしてるよ」

枝を離れて手の中に残った桜の花片の、絹のような手触りを楽しみながら、翡翠は女の振り向かない背中に微笑みかけた。

舞い落ちる桜の花片を捕まえた子どものように、ただ純粋に嬉しかった。

嬉しかった、と、翡翠は言う。出会ったそのときのことを話すたび、本当に嬉しそうに。けれど「君はどうだった？」と尋ねる彼に答える言葉を、桜の君は知らない。

翡翠に嫁いでから二年が経とうとしている。

桜の君は障子を開け放った寝室の中で闇に浮かび上がる桜を眺めながら、ぼんやりと表座敷から漏れ聞こえる喧噪に耳を澄ましていた。広大な邸の向こうから届くざわめきは遠く、桜の木々が風にささやき交わす声に掻き消されがちだ。

春の夜空に朧に浮かび上がる月と立灯籠の仄かな光が、中庭を囲むように植えられた桜の若木の満開の花を白く照らし出していた。八神の山から運び込まれた巨石や、庭全体に敷き詰められた柔らかな苔の陰影も美しい。この邸の主人に似て、隙のない完璧な美だ。

邸の主人——翡翠は二年前、愁恕との婚姻という条件を呑み、三十二歳という若さで宰相の地位に就いた。それ以来、田舎者、成り上がり者と見下してきた黎京の貴族たちも、この洗練された言葉と作法を身につけた美貌の青年を無視することはできなくなった。翡翠は平民出の戦闘集団の頭（かしら）から、この国の重鎮に上り詰めたのだ。しかしそんな地位を得た後も、翡翠が遠い榛京（しんきょう）から自分を慕ってついて来てくれた歩狼隊の隊員たちを軽く扱うようなことはなかった。

今表座敷で騒いでいるのは、仲間の昇進と新入りの入隊を祝うという名目で翡翠が連れてきた歩狼隊の男たちだ。恐れを知らない若者たちの集団に一度酒が入ってしまえば、もう祝い事のあるなしなど関係はない。先ほどから途切れることなく、粗野な響きの榛京の田舎言葉と、豪快な笑い声が響き続けている。

翡翠が彼らに慕われているだろうことは、遠くから喧噪に耳を澄ましているだけの桜の君にもよくわかった。こうしている間にも、馬鹿騒ぎの合間に翡翠を讃えて唱和する声が何度も響いている。

宰相の私兵隊という立場を与えられている彼らの役目は、

ふたり、嘘を

篠崎琴子

うそつきのことばを、かたりなさい。サリエ。
いずれ水底に沈む私の声音で。いつか水面をさまよったお父様を殺し。きっと、隠しつづけなさい。
汚泥にまみれたくないならば、招き手に忌まれたくないならば。けして、ほんとうを言葉にしてはなりませんよ。
――音律に揺り起こされてまずまっさきに、私はそのいいつけを脳裏に浮かべた。何年も以前からまもりつづけるいましめは、いまも荒く、私の弱音を削り取る。
おぼえていますよ、母上様。
大丈夫、忘れてなんて、いませんから。
だって、忌まれたくなんてないもの。
そう、心の内だけで繰り返して、私は暗い水面の向こう側から聞こえくる声に、ゆっくりと意識をかたむけた。
「いでませよ」
あまりに懐かしく、あまりに脆い、優しい声がひくく。ひさかたぶりに、ひととせぶりに、確かに私を呼びよせていた。
水底にしずみきって、どれほどの日々を過ごしていただろうか。今宵はまごうことなく、夏至が終わって最初の満月。先の秋が訪れる前に別れを告げた人がいま、慣例どおりに月日を選んで、夜の湖の外側から私を呼んでいた。
ゆっくりと水の内にて感覚をめぐらせれば、遠く、森の木々の映りしずむ湖畔の方向から、澄んだ碧が揺らめくのが見える。翡翠のいろに染めあげた薄い帯状の布を、ながく、私のもとまで届くようにと、招き手が水にさらしているのだ。
「いでませよ、水に在られる雨の統べ手。水底棲まいの君。水棲の魔の女主人。いでませよ、いでませよ。ふるい言葉に従って、いま、いざ、お招き申しましょう」
湖の奥深くから、岸辺へと向かって泳ぎよれば、ふたたび、その声が水をふるわせる。
水面のむこう、境のあちらから差し出される音律は、ただよう碧の帯とともに、水のこちらに生きる私を、水のあちらへと招く媒体だ。人ならない水棲の私に、儀式をもってして境を越えさせるのである。
碧の薄布にそっと触れると、くいと、私の体が形作られてあちらへひかれる。帯をもってしてたぐりよせるのは間違いなく、幼い日に私の手を取った黒髪の少年だろう。私を招く役割は、先の招き手だった父から、たったひとりの息子へと譲られて久しいのだから。
はにかむようにして、のびた黒檀の前髪ごしにわらう紫の眸は、かずすくない、私のあいするもののうちのひとつ。
いとけなくもやさしい温度で私の指先に触れることを、それを私が大切に握りかえしてふたり手をつなぐことを、おだ

やかに愛おしむ彼は、うら若き私の招き手。
そしていまやたったひとりと成り果てた、水にかかわる災厄にあわぬよう、私が加護する家筋の人間なのだった。
いつくしむべき胸中の思い出に反し、無意識に形作られる表情はかすかゆがむ。再会にほころぶ期待と、水底からまた目覚めることへの恐れが、脆弱な心臓の内に同居していた。それでも力をこめて、形を持ったばかりの足で水を蹴る。
かくしてつめたい水の中を手繰られて、私はこまかな泡を足指の先でうみだしながら、あわく揺らぐ星々のひかりを身に浴びる。空気の渦が刺すほどにつめたく吹きよせ、重く水をふくんだ金色の髪を肌に背に肩にはりつけた。真夜中にともる、月がまぶしい。波を透さずに触れるうまれたばかりの星月の光は、両の目蓋をなでるように、異種の私を出迎えた。
さまよわせるようにして上方へ腕を伸ばせば、私を招いたひとの手が、私の手をしっかりと掴みとり、水の外側へと引き上げた。次いで、水中に端が沈んだままの碧の帯をゆるくまいたもう片方の腕が私の背中にまわり、蒼衣の胸元にやわくひきよせる。つないだ指先の、温度がうれしい。
さて、刺繍のひろがる蒼の布地に額をおしつけるようにしてすこしずつ、私もまた目を見開いていった。境である水面をこえ、湖の水の外にひきずりだされた身は、いまや完全に少女の形をとっている。背に触れて、私を囲う腕のなかに、全身がすっぽりとおさまってしまうほどに。
そうやって境界のこちら側に完全に在り立ち、夜の空気にも慣れた私は、待ちきれずに招き手の眸、あいすべき紫をさがして顔をあげた。私の頭よりも幾分か高い位置で、招き手である青年は、おどろいたようにその表情をわずか変える。
「おはよう、ルイリ」
左手をつかむその指から、かつておさなさを感じたぬくもりは冷め去っていたけれど。いつのまにか、私の身すらつつみかくせるほどに、その体躯は成長を経ていたけれど。彼はまごうことなく、私と手をつないだ紫の眸の——少年だったひとだと、わかる。
「サリエ」
ひくく、かすれてふるえる声で、彼は私の名を呼んだ。
ひととせが巡る以前にこの水辺で別れた時、ようやく青年の気配をその身にきざしていたそのひとは、どうしてだろう。たった一年しか経ていないにしては、異様なほどに背もぐんと伸び、顔立ちも冴えて、いまや若いおとことなっていた。
湖にたらす碧の帯はそのままに、ルイリは片腕だけを使い、肩にかけていた厚手のやわい布で、器用に私の肩をつつむ。
「サリエ。夏が、やっと、きたよ」

みあげた笑みがぎこちなく、いたみ垣間見えてほころぶ。
――隠しごとを、していることをこらえる、私とおなじ表情を。異質なまでにあざやかな変貌をとげた彼は、たやすくそのかんばせへと張りつけた。
とまどいとともに黒の布地にみずからも触れて羽織ろうとしていた私を、一年前まではしなやかな少年だったはずのおとこが助ける。形を得たばかりの両の指先は、唐突に切りつけてきた驚きもあって、思うように動いてくれなかった。
いつからか、水の境を越えるたび切りつけるようになったいたみは、わが身を苛む棘とおなじ形の刃を彼から差し出されたいまとて、変わらず私の身を裂いた。
かつてルイリに、嘘をついたこと。いまもほんとうを隠しつづけていること。こうして彼の手をとるたびにおぼえる罪悪のすべては、そう、すべて私のもたらしたものなのだから。
「天秤繰りの水魔どの。いまや春もとおく去りました。やがて訪う、夏の終わりまでの安息の日々を。どうぞ我ら人の族のもとでお過ごしください」
黒の長衣に身をおさめた私へ、そしてルイリは年に一度の慣習どおりに、魔物招きの言葉を捧げる。いつだって、呪術師として生きるルイリに、サリエとの名で呼ばれ続けた、湖にて冬を眠る水の魔物である、私へ。

「三年も、迎えは遅れたけれど、でも、サリエ。ようやく、またここに来られたよ」
いつか見慣れた紫が、かなしそうにゆがんだ。
「さんねん？」
「うん。三年」
そして、声はふるえる。
「俺がまた水魔を招くことができたのは。俺たち人間の時間で数えて、三年ぶりなんだよ」
三年間、あなたの時間は止まっていたから。凍てた湖ごと。
続けられた言葉に、私は表情を変えた。三年。三年を、私は水底から目覚めなかったのだろうか。まさか、そんなこと摂理に反するではないか。でも、こうしてルイリは見慣れないまでに大人びて、私の前に立っている。
「サリエ、帰ろう。家に帰ろう。ほんとうに、遅くなってはしまったけれど」
ならば、きっと私たちの時間はずれてしまったのだ。
私はとまどいながらもうなずくと、真夜中の湖畔へみちびこうとさしのべられた、彼の手をとる。水のうねりが、ひやりと私へ現実をひきよせた。
かくして私、水魔サリエが、呪術師ルイリとひととせぶりに――あるいは三年を越えて手を触れあわせたのは、春も過

タエナバ

※残酷な描写あり

立田

6.

おろかもの。

我が君の弱々しい罵りを聞きながら私は欠伸をした。頭上の空は刻々と青みを増し、この星に逃れてきてから初めての朝が訪れようとしている。

「ばか。ばかばか。がんこ。わからずや」　しきりに言い募るが、なにしろ細くて甘い声であるから咎められている気にならない。

私は手を伸ばし、騒ぎたてる熱っぽい体を肩甲翅の下に抱きこんだ。我が君はむずかるように、いやいやと首を振っていたが、しばらくすると諦めてことんと頭を預けた。

我が君の柔らかな頬を曙光が紅く染めている。好き嫌いなど言ってはおれず、私たちが辛うじて身を隠すことができた廃屋はもはや修繕不可能なまでに損傷しており、無数の穴から差し込む光で明るかった。追跡者が来たらひとたまりもない。

ただでさえ我が君は一族の中でもひときわ脆弱である。己の面倒とて何一つ見られず、感情が高ぶればすぐに泣き濡れる。しかしそんな我が君でも私の生きるよすがであり日々の糧なのであった。

「こんなにたのんでいるのに、あなたはつめたい」　ほろほろと流した涙すら美味である。

私は宥めるのに労力を費やすよりも、前時代的な構造の機体に寄りかかったまま食事をすることを選んだ。

私は我が君を捕食し、引き換えに我が君を護る。それは同族内での殺し合いをさだめとする我が君一族が生み出した慣習である。私は我が君以外を摂取することはできず、それゆえに生まれながらにして我が君に命を掌握されているのであった。

わたくしのからだをぜんぶたべて、と我が君はあたかも私の考えを読んだようにささやいた。

「いきのびなさい、おねがいだから」　にくたらしいほど必死に頼みこむ。

我が君は本当におろかであった。自分の身を守ることもできないくせに、他の者に心を傾けては涙を流す。覇王の血を引くことも疑われるほど、かよわく、おろかな存在であった。

＊　＊　＊

しかし私にとって、そのおろかさは邪魔である以上に愛すべきものであったのだ。そう、愛していたのだ、おろかな我が君。面と向かっては告げられなかった真実をようやく認め、冷たく静かな躯の傍らで私は待ち構える。追跡者を。もしくは私の死を。

おろかもの、私はひっそりと呟き、不思議な充足感に満たされる。

5.

別れの挨拶を口にはしませんでした。そのかわり、この口は愚かな繰り言とたくさんの嘘ばかり紡いだのです。

「いきのびなさい」　嘘。あなたはわたくしなくして生きてはいけないのだから。

生存本能すら利用したわたくしとあなたを繋ぐなによりも強固な絆。わたくしはあなたの主であるまえに、あなたの糧。無敵の強さを誇るあなたが食することができるただ一つのもの。だからこそわたくしはあなたを従えることができたのです。わたくしが死ねばあなたは餓え、ゆるやかに衰弱し、ほどなく死ぬでしょう。

最強と謳われる黒臣のあなたを殺せるのはわたくしだけ。いくつもの闘いを勝ち抜き、故郷から光の届かぬほどの距離を越えてなお、わたくしはそれを証明してしまったのです。証明する必要などないほどよく知っていたのに。あなたを何よりも大切に思っていたのに。

おろかなのも、ばかなのもわたくしだけれど、ここまで来てまだわたくしをたべないあなたは本当にわからずや。あなたの熱い躰に顔を押しつけて、わたくしはあなたの生の音を聞いていました。

ここはとても寒い。それともわたくしがここに来るまでに色々なものを失くしたからかしら。ひきかえ、あなたはいつでもあたたかい。わたくしに負けず劣らずいろいろなものを失くしたというのに。翅に脚、たくさんの体液。

あなたとわたくしが失ったものを合わせれば、歪な形をした生き物がひとつくらいできるでしょう。もちろんそんな怪物に命など授けられるはずもないけれど。あなたの命を犠牲にするほどの価値はまったくないけれど。

わたくしがもっと賢ければ、我慢強ければ、それともいまのわたくしに欠けている資質がひとつでもあれば、あなたを殺さずにすんだのかしら。

でも。でも、と、わたくしの心は叫ぶ。すべてをかき消すほど強くたえまなく。あなたはわたくしの臣。唯一の黒臣。わたくしのもの。それなのになぜわたくしが思うようにしてはいけないの？　わたくしに巻き込んではいけないの？

「いきのびなさい、おねがいだから」　わたくしは弱々しくおろかな繰り言を口にしました。戯言で白々しい嘘だったけれど真実でもあったのです。

たしかにあなたに生きていてほしいとも思っていたのだから。あなたという強くうつくしい生き物を尊び惜しんでもいたのだから。

だから、わたくしはわたくしだけがずっと怖かった。わたくしが心変わりするのではないかと。わたくしなしの世界であなただけを生き延びさせるすべをなんとしてでも見つけ出そうとするのではないかと。最期にあなたの延命を狂おしく望み、悔悟に苛まれるのではないかと。

けれどわたくしたちはたどり着いたのです。わたくしの命とあなたを賭けて。お互いの手だけを頼りにして。宙の奈辺、わたくしたちの墓場に。

結局、叫びはわたくしの持ちうるものの中で何よりも強かったの。そう、ある意味、あなたよりも。わたくしの命も、あなたの命もすべて吹き消す勢いがありました。

どんなに高貴な血を引いても、強大な力を受け継いでも、ほしいのはいつもひとつだけ。ものごころついた最初の日、わたくしたちの生が始まったあの日、わたくしに差し伸べられたあなたの手。たなごころを感じたその日から、ほしいのはいつもそれだけ。それだけを愚直にもとめていたの。

あなたは知っていたかしら。こんなに醜くおろかなわたくしを。あなたへの独占欲だけで、脆弱な躰を鞭打ち、ここまで生きのびたわたくしを。

きっと矛盾には気づいていたでしょう。でもそれをいうなら、わたくしたちは最初から矛盾でしかなかった。あなたの主であり餌であるわたくし。わたくしの従者であり捕食者であるあなた。それ以外にわたくしたちを形容するものはあった？　わたくしはあなたにとって、何かそれ以外のものだったかしら？

わたくしはあなたをあなたの同胞から引き離し、殺戮しかない道を歩ませた。わたくしの愛はあなたの故郷である惑星を滅ぼし、わたくしの恋はあなたを殺す。でもわたくしはこの短くて無益な一生の中で、あなたの手を決して離さなかったことを誇りに思っているの。

わたくしの毀れた躰は歓喜にふるえ、わたしの眼はもう光を求めません。ここから先は永遠の夜、わたしがずっと求めていた終焉。

あなたのあたたかな闇に閉じ込められて、わたくしはまわされた手に身をゆだねました。わたくしの命の灯はもう消えるでしょう。そうしてあなたもじきに。朝など二度と迎えなくていいの。もう懼れるものはなにもない。わたくしがなんとしても離さなかったあなたの手で、いまここで終わりにしてほしい。

密の紡ぎ

藍間真珠

アーデルとエーデルが重なる夜に、異界への道が開かれるという。お伽噺にも似たその噂が本当であることを知ったのは、季節が一巡りもする前のことだった。

ユヅイヤは目深にかぶったフードから素早く視線を走らせ、砂だらけの荒野を駆ける。追ってきているのは腹を空かせた獣だ。先ほど口にした干し肉の匂いでも嗅ぎ付けてきたのだろうか。腰からぶら下げた短剣へと手をかけ、ユヅイヤは目前にある大岩の陰へと滑り込んだ。そして振り向きざまにそれを振るう。

勝負は一撃でついた。生暖かい血しぶきが頬にかかり、獣の断末魔が耳障りに響く。乾いた砂の上に落ちた獣は、不自然に体をひくつかせて前足を宙へと伸ばした。だがやがてそれも地へと落ち、血だまりで震えていた後ろ足も動かなくなる。背丈は彼の腰ほどあるが、さほど動きは速くないパチルの一種だ。だが馬鹿みたいに持久力があり、放っておくと痛い目を見ることになる。パチルはいつも砂嵐に紛れて荒野を走り回り、太い爪で獲物の背中を狙っている。

すっぽりと体を覆うマントの内側から布切れを取り出し、彼は短剣の血を拭った。獣の太い首も一刺しにできる優れ物ではあるが、手入れは必要だ。

「追いかけっこは俺の趣味じゃないんだよ、悪く思うな」

絶命した獣へと乾いた笑みを向け、彼はまた歩きだした。巻き起こった砂煙のせいで何も見えないが、じきに血の臭いを辿って他の獣がやってくるだろう。特にパチルはあの長い鼻で些細な臭いにも気づき、どんなに遠くからでも長い足で駆けてくる。そうなる前にここを離れなければ。

彼がここへ迷い込んできたのは、ちょうどこんな風に砂煙がひどい日だった。夜中に小屋を飛び出した彼は、森の中で煌めく宝物(ほうもつ)の光に気を取られ、崖から足を踏み外した。そしてこの荒野へと落ちた。前後の記憶は曖昧だ。足を折るような怪我も負わなかったので、大した崖ではなかったのだろうが。しかし視界の利かない真夜中で、しかも体中が痛む中、周囲の様子をしっかりと確認するのは困難なことだった。それでも、もっとよく見ておくべきだったと今は後悔している。空に輝く二つの月――アーデルとエーデルの重なりだけが記憶に残っていても、ほとんど意味はなかった。

あの崖を、二つの月を求めて彷徨い歩き、季節が一巡りした。会う人に尋ねてその度に情報を得てはきたが、いまだ確かなものへと辿り着いてはいない。むしろ絶望的な話を耳にするばかりだった。

彼は腰からぶら下げた袋をまさぐると、干し肉の量を確認した。あと数日もてばいいというところか。またどこか近く

の集落でも探し出さなければならない。物々交換がこの世界の原則だが、今度は何を手渡せばいいだろう？　獣から剥ぎ取った毛皮はもうない。自慢の肘当ても、残っているのは後一枚だ。

「勝手にやったなんて言ったら、オミコは何て言うんだろうな……」

右にだけ残った薄い肘当てを、彼はやおら見下ろした。山奥に生えているというラダを編んで作った肘当て、膝当て、胸当ては、村の中でも一目置かれていた。軽い上に動きの邪魔にもならず矢を弾くことができるそれは、森の中を走り回る彼らにとってはありがたい物だった。しかし今それを編むことができるのは、オミコを含めて数人しかいない。

ユヅイヤは歩調を速めた。口の中に入りこんだ砂を吐き出しても、喉の奥に苦いものが溜まっている。飲み込むこともできないこのざらざらとした感覚は、あの日以来ずっと変わらなかった。最後に見たオミコの寝顔が脳裏をよぎる度、さらに眉間に皺が寄る。砂まみれになって幾分かくすんだ黒髪を、衝動的に掻きむしりたくなった。

「馬鹿だな」

何も言わずに飛び出したのは、どう考えても愚かだった。だがいてもたってもいられなかった。一度気づいてしまえば心当たりなどいくらでもあって、確信してしまえば後悔しか湧き起こらない。自己嫌悪という段階はとうに越えていた。

砂嵐が強くなる。ユヅイヤは瞳をすがめると、フードの端を手で押さえた。翻ったマントがうるさく騒ぎ、腰から下げている袋をも揺らす。枯れかけた草が奏でる旋律は、悲鳴のようでもあった。

足を止めて風が弱まるのを待っていると、かすかに鈴の音が聞こえたような気がした。こんな荒野で聞こえるはずのない甲高い音に、彼は思わず顔を上げる。砂でかすんでいる視界には何ら変化がなかった。うねるような風の動きにあわせて、砂の濃度が変わるだけだ。

「いや――」

違う。その先に何かがある。砂嵐の向こうに、黒っぽい物体が見えた気がした。岩でもないし、獣の類でもなさそうだ。ここらの獣に黒い毛を持つものはいない。そんな目立つ奴はとうに死に絶えている。

何かの手がかりになればと、ユヅイヤは地を蹴って走り出した。見知らぬ獣であるならば、今のうちに仕留めておく方がいい。そう理由を付け加え、彼は口角を上げた。代わり映えのない平地にうんざりしていたところだ。いい毛皮が取れたら、次の物々交換にも使えるかもしれない。

駆けていると、不意に少しだけ風が弱まった。でたらめな模様を描きながら巻き上げられていた砂が、徐々にすすけた荒野へと沈んでいく。走る彼の目に映ったのは、うずくまる子どもの姿だった。深緑の布を体に巻き付けた黒髪の少年が、荒野の真ん中で座り込んでいる。年はまだ十を越えていないか？　今にも飛ばされてしまいそうな華奢な体躯だ。

「こんなところに子どもが？」

口の中で呟いて、ユヅイヤは速度を落とした。少年はユヅイヤには気がついていないらしく、その場を動く様子もない。集落になら子どもがいてもおかしくないが、こんな荒野に一人でいるところなど見たことがなかった。妙だ。警戒しながらも、ユヅイヤはゆっくりと近づいていく。短剣の柄へと密かに手を掛けて、彼は唇を結んだ。

すると、少年がやおら顔を上げた。異変を嗅ぎつけたのか頼りなく辺りを見回した後、その双眸がユヅイヤを捉えた。はじめはぼんやりとしていた灰色の瞳が見開かれ、ついでその小さな口がめいっぱい開けられ――盛大に何かを吐き出した。たぶん砂だろう。ここで大口を開けるとそうなる。咳き込まなかっただけましか。

「ひ、人がいる!?」

風に吹き飛ばされそうになりながら、少年はよろよろと立ち上がった。見たところ普通の子どものようだ。それでも慎重に前へ進むと、ユヅイヤは少年からやや距離を置いたところで立ち止まった。このくらいであれば、砂嵐の中でも会話は可能だ。

「お前、何でこんなところにいる？」

「何でって……何でだろう？　わからない」

「はあ？」

「だって気づいたらこんな砂だらけのところにいたんだ！　歩いても歩いても森も村も見えてこないし」

唇を尖らせた少年を、ユヅイヤは半眼で見下ろした。まさかという予感が、彼の中で渦巻き始めていた。こんな場所に子どもがいるわけがない。こんな子どもが、ここに一人で辿り着けるわけがない。しかも無傷でだ。そうなると何者かによって運ばれてきたことになるが、そんな物好きがいるはずもなかった。風以外は。

「ここはどこなの？　僕、ひょっとして迷ったの？　早く帰らないと母さんが心配するのに……」

「ひょっとしてお前、アーデルとエーデルが重なる夜に外に出たのか？」

しかし、もう一つ心当たりはある。鼓動が高鳴っているのを自覚しつつ、努めて平静な声でユヅイヤは問いかけた。う

なだれかけていた少年は、顔を上げると不思議そうに小首を傾げる。そして目玉が落ちそうなほど眼を見開いた。
「あ、そうだ！　今日はアーデルとエーデルが重なる日だった！」
　思い切り大口を開けて再び咳き込んだ少年から、ユヅイヤは視線をはずした。やはりこの少年も、月が重なる日に外へ飛び出した馬鹿者だったようだ。しかも口ぶりから予想するについ先ほどのことだ。この少年の話をもっと詳しく聞けば、何らかの手がかりが得られるかもしれない。
「わーまずいことしちゃった、うわぁ、どうしよう」
「おい、お前。名前は？」
「……え？」
「名前。俺はユヅイヤだ。お前、名前は？」
「えっと、ヒギタ」
　頭を抱えた少年――ヒギタに数歩近づくと、ユヅイヤは片膝をつく。ほぼ反射的に返答したらしいヒギタは、目を白黒とさせて眉根を寄せていた。ユヅイヤは口の端を上げると、ヒギタの細い手首を掴む。
「さっさと立てヒギタ。行くぞ」
「え？　どこに？」
「帰りたいんだろう？　ここにいると獣が来る。場所を変える」
　半ば強引にヒギタを立ち上がらせると、ユヅイヤは遠くを見やった。風に巻き上げられた砂は、相変わらず世界を塗りつぶそうとしている。こんなところで会話をしていたら、砂に紛れた獣が近づいてもすぐには気がつかない。
　よろけるヒギタを無理やり引き連れるようにして、黙々とユヅイヤは歩いた。子どもには辛い速度だったはずだが、ヒギタは泣き言も漏らさなかった。ある程度現状は把握できているらしい。
　幸いなことに、しばらくも行かないうちに適当な小屋が見つかった。巨大な岩陰に身を潜めるよう一軒だけ存在しているところを見ると、どうも近くに集落はなさそうだった。ヒギタもそろそろ限界だろうと判断して、仕方なくユヅイヤはその戸を叩くことにする。こういう辺鄙なところに住む人間にろくな奴はいない。食われかけたこともある。最悪の事態を想定しながら、彼は小屋の前に立った。
「ここに入るの？」
「そうだ」
「人の家だよ？」
「そうだな」
　不思議そうに首を傾げるヒギタを無視して、ユヅイヤは中

の気配を探る。砂嵐の鳴き声のせいで確信は得られないが、少なくとも大人数が籠もっている様子はなさそうだ。それなら何とかなると踏み、ユヅイヤは戸を軽く叩く。

「誰かいないかー？」

声をかける。が、返事はない。もう一度同じことを繰り返してから、ユヅイヤは思い切ってその扉を押し開けた。軋んだ音を立てつつも、それは容易く彼らを迎え入れる。

「誰もいないみたい」

「そうだな」

ユヅイヤは一人で中へと足を踏み入れた。辺りへくまなく視線を走らせ、小屋の中を確認する。人気はない。外から見た小屋の大きさと比較してみても、隠し部屋の類もなさそうだった。足の裏で床の感触を確かめながら、彼はゆっくり進んでいく。幸いにもヒギタは入り口側で佇んだまま、不用意に踏み込んでくる様子もなかった。

「本当に誰もいないみたいだな」

たっぷり時間をかけて様子をうかがってから、ユヅイヤはそう判断した。それから入り口の方へ視線をやると、それが合図とばかりにヒギタが中へと入ってくる。扉が閉まると、砂嵐の悲鳴が少しだけ遠ざかった。

「ここで休むの？」

「お前、もう歩けないだろう？」

「え、馬鹿にしないでよ！　僕はまだ歩けるっ」

「あーそうかい、そうかい。でも俺はお前から話が聞きたいんだ。外じゃあまともに口も開けないだろ」

唇を尖らせるヒギタを見て肩をすくめ、ユヅイヤはその場に座り込んだ。これだから子どもというのは面倒くさい。だが少しでも情報が得られるのならば、多少は我慢できる。渋々と近づいてきたヒギタが腰を下ろすのを見届けて、ユヅイヤはフードを取った。砂が床に落ちる音がする。

「うわ、すごい量」

「お前の髪はもっとひどいことになってるぞ」

「えーどうしよう。母さんに怒られる」

ぶつぶつと文句を言いながら、ヒギタは体に巻き付けていた深緑の布を床に落とした。軽く砂埃が舞い、ユヅイヤは呼吸を止めて顔を背ける。

「うわ、これもひどいや」

砂を払ったヒギタは思い切り眉根を寄せる。そんな彼へとまた視線を向けたユヅイヤは、今度は別の理由で息を止めた。布の下から現れたのは、見覚えのある胸当てだった。ララダを編んで作ったそれは他の村では手に入らない。

「――ヒギタ、お前ひょっとして、あのギアンナ村から来た

両片思いアンソロジー「銀のリナリア」　企画サイト

http://indigo.opal.ne.jp/anthology2/

イベント頒布情報、通販についてはこちらからどうぞ！

両片思いアンソロジー「銀のリナリア」ミニ

http://p.booklog.jp/book/54485

著者：藍間

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/aima/profile

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/54485

ブクログ本棚へ入れる

http://booklog.jp/item/3/54485

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ